

per と Far eastern library がある。News paper library には世界各国の主な新聞がととのっており、日本からは「朝日」と「日経」が約1月遅れで届いていた。ここの library は研究用資料としての利用もさる事ながら、世界各国からの留学生にとっては母国からのニュースに接する憩いの場所でもあった。Far eastern library には日本、韓国、中国の3ヶ国の図書が豊富に収められてあった。日本のものでは各種年鑑や白書それに「中央公論」「文芸春秋」などの月刊誌や「朝日ジャーナル」等数種の週刊誌もあり、東洋文化を研究している学生によく利用されていた。

私が学習や研究に主に利用した図書館は、Engineering Hall の中にある工学部の図書館でそれ以外に物理、化学、数学の図書館にも時折足を運んだ。それらの図書館で気づく事は、アメリカの学生は図書館を実によく利用するという事であった。これはまずアメリカの大学教育が非常に活発で宿題が頻繁に出され、さらに学生が独自に勉強し、自分の納得のいくまで理解する事が要求され、自分が興味を持った分野にどんどん深く立ち入っていく事が期待されている事にその原因があるようだ。学生として授業に出ると、まず初めに教科書と参考書の紹介があり、たいていの学生は近くの本屋で教科書を買って求めるが、本の値段

の高いアメリカでは参考書を買う学生はほとんど見あたらない。そこで参考書類は図書館を利用するという事になるわけだが、できるだけ多くの学生に利用できるように Reserved Books という制度がある。これは参考書として指定された本の貸出しを禁止し、図書館の閲覧室でのみ読めるようにするもので、この事が図書館で勉強する学生が多いもう一つの原因にもなっている。

ところで理工系の図書館を利用して気づく事は、日本で出されている欧文雑誌はほぼあらゆる分野でそろえられている事である。しかしながらこれはある意味で当然な事であるかもしれないが、ドイツ語やロシア語の雑誌が数多くあるのに対して、日本語で書かれた雑誌はほとんどその姿が見られないというのが実情である。

Illinois 大学の図書館の本の貸出しには、身分証明書と図書館利用の為のカードが必要で、又貸出しカードに一つ一つ書きこむなど全体的に旧式のものであった。しかし私がいる間にも少しずつ改良され、コンピューターの導入の為身分証明書がコンピューター読みとり可能カードに改められ、又一部の図書館では、本の番号を自動的に読みとる装置も導入されて新しい波が来ている事は明らかであった。

(工学部助手)

図書室めぐり

農 学 部 図 書 室

1. 図書室の機能

図書館機能は学部主題分野についての研究図書館機能と共に、学部学生、大学院生のための学習図書館機能を兼ね備えているが、学部がもつ性格として研究に重点をおく、むしろ研究図書館としての機能に中心をおいている。

2. 図書、雑誌等図書館資料の集中化

研究領域の限らない拡大と同時に、研究は学際

的傾向にあり、また一方ではより細分された主題への専門化が進みつつある。このため図書館資料の充実や、参考業務の内容が多岐多様化することになり、図書館としてこれに対処しなければならない。とすれば農学部図書室は、従来のように1つの中央図書室と複数の教室図書室等で構成され、また資料がそれぞれに分散配置されている状態では、研究者等図書館利用者に不便であるばかりで



なく、研究に支障を来たすことは明らかである。

そのため積極的な顕在的利用者の要求はもち論、潜在的利用者の要求がどこにあるのかを含め、これらの要求に対処しうる図書館を求めて、昭和39年図書委員会が設けられると同時に、図書館資料を充実することと併行して、分散している雑誌を中央図書室に集中することが検討されてきた。昭和50年に中央図書室が現在の場所に移転されたのを契機に、この基本線に沿って資料の集中化が軌道にのりはじめ、現在に至っている。

3. 図書館資料の集中による図書館活動

参考業務は図書館活動の1つとして従来から行ってきたが、資料不足、二次資料の未整備等のため、担当者の熱意にもかかわらず必ずしも十分要求に応じられていなかった。しかし、図書館資料の集中化に伴い専門分野の中心的な雑誌や周辺領域の雑誌、資料が中央図書室に集中され、また不備であった二次資料も順次整備されてきた。

この集中による資料の充実によって、研究図書

館としての参考業務、整理業務も質的な転換を迎えようとしている。たとえばその1例として参考業務の内容と依頼件数をみると、所在調査が従来参考業務の大半を占めていたのに対して、二次資料の整備が進むにつれて事項調査が増加し、国内外の必要情報を提供することが可能になった。これを数字でみると、件数は昭和49年では約1,900件であったのに対して、昭和51年では倍近い約3,700件となり、今後増加することが予想される。

また依頼者は学部教官、学部学生、大学院生が大半を占めているのが当然であるが、これに加えて他学部、他大学、機関の研究者からの調査依頼が含まれ、これもまた年々増加の傾向にある。

参考業務の件数の増加と共に、複写による資料の取り寄せの要求があり、国内資料はもち論、BLLDやNAL (National Agricultural Library) 等国外の機関よりの資料の取り寄せを行っている。

資料の集中化によって整理業務においても内容の転換を進めつつある。資料の集中は利用者の増加を捉し、要求内容は多様化している。そのためこれに応ずるには資料の充実を計る必要がある。一般的に閲覧と整理は切り離して論ずることができないのであるが、中央図書室としての必要資料は独り整理で選定されるのではなく、利用者の要求をきく閲覧との密接な関係があってはじめて適切な蔵書構成ができるのである。このため整理では閲覧を通じた利用者の必要資料をできるだけ整備するようにしている。

農学部図書掛長 辻 武夫

告 知 板

BLLD の文献複写サービスについて

BLLD というのは、英国国立図書館 (British Library) 貸出部門 (Lending Division) のことであり、世界の学術雑誌を網羅的に収書して国内、

国外の図書館等に対して、幅広いサービス活動を展開しています。

BLLD は世界各国から47,500タイトルの出版物